

なか の とも ひろ
中 野 知 洋

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第128号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 中国学専攻
学位論文題目	沈従文小説研究
論文審査委員	(主査) 教授 花登正宏 教授 中嶋隆藏 教授 三浦秀一 教授 仁平道明 助教授 佐竹保子

論文内容の要旨

漢族・土家族・苗族の血を引くとされる沈従文(1902-88)は、1925年の文壇登場以来、郁達夫等の援助によって生計と作品掲載の機会を得ながら、また一方では徐志摩・胡適・陳源等、後に「新月派」と称せられる欧米留学経験を持つリベラリスト達の庇護の下、胡也頻・于廣虞・朱湘等若き文学青年と文学修行を積んだ。小説、新詩、戯曲などあらゆる形式を全方向的に取り入れ、「最初の職業作家」を自認していたことが注目される。北京滞在期より丁玲・胡也頻らと共同生活を開始、1929年には上海において彼らとともに『紅黒』『人間』等の雑誌を出版する。その作品は、やがて出身地湖南省の少数民族たちの素朴で健全な生活の描写へと向かい、性愛をもあからさまに描いたため、賀玉波ら左翼評論家の批判を浴びたこともある。所謂「どんでん返し」を主たる技法とした短篇小説に特徴があると言われ、30年代文壇においては「文体作家」「天才作家」「多産作家」という評語が彼の代名詞となったが、褒貶が激しく、一方では「無思想作家」「空虚的文学者」(空っぽの文学者)としてしばしば攻撃の対象ともなった。すなわち、都会及び田舎における男女間の性愛や、瑣末で平凡な身の出来事を好んで題材として取り上げるこの小説家の作品は、内容からもまた文体という側面からも、軽薄であると判断されるとして退けられたわけである。左翼的な文芸観よりするこの批判は、その後長い間沈従文の評価として確定し、以後70年を経た現在、様々な切り口の沈従文研究が行われている今日に至っても、多少の揺れや相違こそ見られるものの、基本的には「空虚的作者」という認識を踏襲し続けていて、この枠を大きく外れたり、これを根底より覆すような解釈は現れて

いない。従って、「文体作家」という評語を持ち出す場合にも、文字の彫啄にのみ長じて、内容が置き去りにされているという否定的な文脈において用いられることが多いように思われる。

さて、ここに小論が一貫して取り上げるテーマは、北京における文壇登場（1922年もしくは23年）、それがほぼ完成したと考えられる上海時期（1931年）に至るほぼ十年間の作品を精読し（ただし数か月間に及ぶ武漢滞在時期もひとまず上海時期に連なるものと捉え、検討の対象とする）、沈従文が関わったと考えられる同時代資料を参考にしつつ、とくに文体の獲得という側面に注目しながら、その独自の作風の成立の過程を、明らかにすることである。

沈従文の小説は、例えば小島久代氏によって、「(一)都会もの、(1)都会における自画像、(2)都会の学生や青年の愛を描いたもの、(3)小役人や編集者の生態を描いたもの。(二)湘西もの、(1)軍隊生活、(2)兄弟、親族にまつわる思い出、(3)湘西の下層民の生活や幼年時代の思い出、(4)苗族の山賊を描いたもの。」という整理が試みられているように、大きく分類され、とりわけ「湘西もの」というジャンルの小説こそが、この少数民族出身の小説家の特色の最もよく表れた、そして美しい作品であるとして、研究の俎上に取り上げられることが多く、この分野についてはすでに中国内外に鬱蒼たる研究の蓄積を持つ。

そこで小論では、いささか視点を変え、小島氏の言葉に拠れば、これまでほとんど顧みられることのなかった「都会もの」を中心に取り上げることにより、沈従文作品の新たな側面を映し出すことを目的とした。美しい湘西地方の風物がスケッチ風に描かれたような作品の多い「湘西もの」に対して、作者の周辺にいる人物を手当たり次第に集めては書き散らしたという印象が強い「都会もの」は、これまでほとんどまともに取り上げられることすらなかったが、「文体作家」誕生の過程を考察するためには、この小説家独自のものとして特記するような内容がないとして退けられてきた「都会もの」に着目することにより、その作風の演変に焦点を当てた分析が可能になると思われる。

第一章

1923年、湖南省西部・湘西地方より単身上京した沈従文は、1925年、郁達夫の骨折りによって『晨报副刊』にその最初の作品発表の機会を得たとされる。その後、徐志摩・胡適・陳源らとの交遊の中に身を置きながら、『晨报副刊』や雑誌『現代評論』などを主たる活動の場として創作活動を続けて行った。1928年、『現代評論』や北新書局の上海移転に導かれる形で上海に移り住むまでの三年間の北京滞在期、沈従文の作品はひたすら上達を続ける。

この時期の沈従文の作品には、書簡体・日記体といった自己の内面を告白するための形式が多く認められる。これは、沈従文自身が自作について「自分に対して忠実な芸術」を描いたものであるとした記述と対応する。凌宇は、これら沈従文の初期の作品を、「自叙伝」と総括し、「文学作品は、すべて作家の自叙伝である」と述べた郁達夫の影響を指摘する。本章では、北京時期の沈従文の自叙伝的作品を中心に上げ、これらの作品の時間描写のあり方が極めて変化に富んでいるということに注目し、主人公の内面の描写と時間描写との関わり合いを分析することによって、沈従文作品の変化の過程をたどることを目標としたものである。

日記体小説においては、日付ごとに時間が区切られるという大きな制約に従って物語が展開するという特徴が指摘できる。「公寓中」（1925）は、主人公の懺悔の描写などから、郁達夫の直接的な影響を指摘できる作品である。主人公は、ひとり都会のアパートの中で、貧困と孤独

とに苛まれるが、その際、時計の時を刻む音に不安といら立ちをかき立てられる。日記・時計という直線的な時間を刻むための装置が、主人公の内面と大きく関わる。自叙伝的作品の中に目立つのが、主人公がむだに費やしてしまったものとしての、浪費された時間、という記述である。浪費した時間は、燃えつきて失われてしまった自己の内面と結びつき、そこに何ごとに対しても臆病な「怯歩者」という人物形象が生まれる。

1926年頃から、時間描写のあり方は極めて多様化し、「一個晩会」(1927)のようにモンタージュの技法を用いたと考えられるものや、前半と後半とで時間の流れる速度を書き分けているものなど、複雑で、かつ精密さを増す。郁達夫を模倣した単純な内面の告白からの進歩の過程が、時間描写の側面からも確かめられるのである。

第二章

1927年末、それまで北京での創作活動の母胎であった雑誌『現代評論』や、彼の作品の出版を引き受けたこともある北新書局の移転などに促される形で、沈従文もまた上海に移住した。1927年後半から、朋友・胡也頻の国民党による虐殺を契機に上海を離れる31年までの時期、沈従文の作品には、題材の多様化や精密な構成に、著しい進歩と成熟の痕跡が窺われる。申請者は、沈従文の上海滞在時期における文芸創作、とくに小説作品について、この小説家の上海文壇における影響関係の検討、文体論的視点からの考察、新聞・雑誌など副次的資料の援用による社会史的観点などを含めた総合的な研究を志すものであるが、本章では、沈従文にとっての上海滞在時期の持つ意味を広い視野から眺め理解することを可能ならしめるため、上海に活動拠点を移す直前の1927年後半以降の沈従文の作品の特徴を考察し、解釈を与えた。考察にあたっては、この時期を境にしばしば沈従文の作品中に登場する「自殺」という言葉に注目し、「自殺」を手掛かりとして北京から上海へ至る沈従文作品の特徴の演変を、帰納的に追跡する方法を採った。

沈従文はその創作活動の開始以来、一貫して「文学作品は、すべて作者の自叙伝である」と述べた郁達夫文学の影響を強く受けていたことが知られており、彼の文学観は公開書簡「致唯剛先生」(1925年)に示された「自己に忠実な芸術」という言葉に集約される。同時に「自己に忠実な芸術」とは、沈従文が郁達夫文学に対して与えた評語でもある。

1927年以降の沈従文の作品、とりわけ郁達夫作品を模倣したと考えられる日記体・書簡体作品は、そのほとんどが臆病で病気がちの主人公が都会での憂鬱の中で抱く「金銭・名誉・女人」への欲望と葛藤を主題としたものであり、この「金銭・名誉・女人」の主題には、例えば郁達夫の「南遷」(1921年)からの直接的影響が窺えることを指摘した。同時に、さまざまな作品の中に登場して「金銭・名誉・女人」という欲望を繰り返す紋切り型の登場人物の形象を、「怯歩者」あるいは「怯漢」(いずれも臆病者・卑怯者の意)という名称で抽出することが可能であることを示した。

さて、「自殺」という言葉が初めて沈従文の作品中に登場するのは、創作活動を開始して間もない「公寓中」(1925年)であるが、「公寓中」のようなごく初期の作品にあっては、「金銭・名誉・女人」の主題を扱った作品であっても、登場人物(怯漢)が積極的に死を選択することはなかったと言える。主人公の葛藤や悩みが明確に死への指向と結びつき、「自殺」という言葉が作品において積極的な意味を持つようになるのは、「老实人序」(1927年)からのことである。あたかもこの時期、「怯漢」という典型人物の抱える悩みが、一方的な女性への欲望や劣

等意識（すなわち「女人」の主題）から、男女相互の愛情（「恋愛」）へと変化する。そして、「女人」から「恋愛」への変化に伴って、例えば女性への劣等意識に苛まれた男に対しても対等な愛情を与える街娼など、新たな人物形象が生み出されるのである。

やがてこの時期に「恋愛」が「自殺」という言葉と結合して、沈從文作品のひとつのパターンとなる過程を、作品中にしばしば引用されるゲーテ『若きウエルテルの悩み』の文脈を検討することによって、提示した。『若きウエルテルの悩み』は、まさしく男女の「恋愛」によって主人公が自殺を遂げる書簡体の物語である。検討の結果、「自殺」という言葉は「恋愛」と結びついて次第に深刻さを失い、言葉の上での約束ごとに変化して行く。「自殺的故事」（1930年）では、『若きウエルテルの悩み』は浮華なアメリカ映画などとともに並列されて、コミカルな文脈で語られさえするのである。

考察によって得られた結論を概括すれば、沈從文文学における主題の変化（「女人」から「恋愛」へ）、そして「恋愛」と「自殺」との結合の過程に、単純な郁達夫文学の模倣を卒業した、上海時期に至る沈從文の作品のふくらみが窺えるのである。

第三章

第二章において得られた結論、すなわち初期の沈從文の作品の中に「金銭・名誉・女人」という郁達夫に模倣した主題と、「金銭・名誉・女人」という主題に対する欲望や葛藤の形象化である「怯漢」という典型人物が作品中に繰り返し登場すること、さらに、1927年頃を境にして、「女人」に代わって「恋愛」という言葉によって登場人物の男女関係が表現されることが多くなり、やがて「恋愛」と「自殺」という言葉が結合するに至ることを踏まえて、本章は、上海時期における沈從文の作品に以上の特徴がどのように受け継がれたのかについて、「自殺」という言葉を中心に考察を加えたものである。

主に取り上げた作品は、上海時期の沈從文の自殺描写のさまざまな特徴を備えた作品である「知己朋友」（1930）である。作品の検討に先立って、『沈從文文集』に未収録の該作品の書誌的な事柄について、従来知られていなかったいくつかの点を示した。

第一節では、「知己朋友」には「怯漢」という形象が登場し、「名誉・金銭・女人」への欲望と葛藤を口にする、郁達夫的な特徴が色濃く残されていることを述べ、その上で作品に登場する新婚夫婦によって新たに男女相互の愛情である「恋愛」がもたらされることを指摘した。すなわち「知己朋友」は、「女人」の主題から「恋愛」への変化の過程を示す、過渡的な作品であることが分かる。

第二節では、主人公が倦怠と厭世から自殺を企図して予約した「××旅館」という場所に注目し、同時代資料を援用しながら、当時旅館が恋愛の空間であると同時に自殺の空間でもあったことを示して、「知己朋友」が「怯漢」から「恋愛」への物語であると同時に、「恋愛」と「自殺」との両義的な意味を持つ極めて興味深い作品であるとの解釈を示した。

さらに第三節では「自殺的故事」など「知己朋友」以後の作品にも触れて、次第に「自殺」から深刻さが取り除かれ、言葉の上の約束ごとに変化して行くことを指摘した（結局自殺しない主人公）。ときに「自殺」という言葉は、コミカルな文脈の中で用いられるようになるのであるが、同時代の別の作者による、「自殺」を扱った複数の作品の中にも同様の現象が見られる。

以上の諸点より、「知己朋友」が北京時期の特徴をなお残しながら、新たな段階への試みも窺われる過渡的な作品であるとの結論を得た。

なお第二章及び第三章の註に示した資料は、上海図書館等における調査によって得られた成果を盛り込んだものであり、小論によって新たにもたらされた文学史的な知見も、少なくない。

第四章

続いて第四章においては、沈従文の、1927年末より31年初夏に至る上海滞在時期の文学活動について、検討を加えたものである。いわゆる「新月派」の一人と目される沈従文については、従来の研究の関心が、『新月』に連載された作品を中心に向けられてきたことは当然とも言えるけれども、一方で彼が胡也頻・丁玲等とともに薩坡塞路204号の公寓に活動の拠点を置き、文芸誌『紅黒』『人間月刊』（ともに1929年1月創刊）を発行していたことも広く知られている。沈従文は、この時期雑誌『鎔爐』『現代文学』等にも関わるなど旺盛な創作活動を示していたが、その後の展開について、文学史の関心は従来、専ら1931年1月の胡也頻の逮捕と処刑にまつわる物語に向けられていて、沈従文が1929年後半から30年前半に至る一年間、ひとり上海北郊の呉淞地区にある中国公学大学部において教鞭を執っていた経過については、ほとんど注目されることがなかった。上海滞在中に発表された沈従文の作品について検討を加えたとき、この時期から現れるようになった特徴のうち、後の作品にまで受け継がれる幾つかの点には、中国公学との深い関連が認められる。本章は、呉淞滞在時期における沈従文の創作活動の詳細を明らかにした上で、沈従文作品に見える特徴の多くが中国公学における生活の中からもたらされたものであり、この呉淞時期が沈従文文学にとって重要な意味を持つと考えられることを明らかにしようとしたものである。

論述に当たっては全体を三節に分ち、第一節では、この当時呉淞地区には中国公学の学生と教師を中心とした文芸団体が複数活動して「呉淞文壇」とも言うべき活況を呈しており、徐志摩の推薦と胡適の招聘によって中国公学に講師として迎えられた沈従文も、何家槐・劉宇など中国公学の文学青年を指導するという形でこれに大きく関与していたことを指摘した。

第二節では、沈従文及び学生達と徐志摩との関係に焦点を当て、前半では彼等が徐志摩の世話によって『新月』や大東書局の学生誌『現代学生』に作品発表の機会を得ていたことを明らかにし、後半部分では沈従文及び学生詩人の作品の中に徐志摩の影響を色濃く受けた表現が見られることを例証した。

第三節は、沈従文自身の中国公学における創作活動について検討を加えた。このうち前半部においては、中国公学の学術刊行物『呉淞月刊』の調査に基づいて、『呉淞月刊』第四期所掲の「自殺的故事」の検討を中心に、呉淞時期に生み出された沈従文文学の表現の特徴について論述した。その際、掲載作品と出版時期から呉淞と深く関わると考えられる『沈従文甲集』という作品集について、これが中国公学時代のアンソロジーであると判断されることを示した。後半部分では、中国公学の課外活動として活動していた文芸サークル「中国文学系系会」と、その機関誌『中国文学季刊』と沈従文との関わりについて論述した。『中国文学季刊』からは羅爾綱・劉宇・張兆和など中国公学の学生が積極的に文学活動を展開していたことが窺えるほか、中国公学が課外活動を援助していたことを明らかにした。また、該誌第二期所掲の沈従文「「沉」的序」には、この時期の沈従文の文学観が色濃く映し出されていることを指摘した。

以上、沈従文の上海時期の作品に見られる傾向の多くが、中国公学における生活の中から生み出されたものであり、その大きな要因が、学生との切磋琢磨にあることを示した。中国公学教師という経歴は沈従文という小説家に広く社会的な地位を引き上げる契機を与えた。学歴の

ない若者が後に京派文壇の頭目の地位を占め、戦後に至って服飾研究や伝統工芸研究という業績により、研究者としてのイメージが定着するのも、遑れば全てこのとき大学教師という看板を手に入れたためであると言える。中公における経験は、貧困と女性に対する焼け付くような思いだけを綴っていた初期の沈從文の作品に大きな転換をもたらした点において、画期的な意味を持つものと考えられる。

第五章

第四章において得られた結論に基づいて、沈從文の吳淞時代における最も代表的な作品であると考えられる中篇小説「冬の空間」を中心に据えて、該小説に備わった様々な特徴を検討するとともに、この時期の沈從文文学の傾向と、後の彼の作品に影響を与えた点について考察を加えたものである。

「冬の空間」は、吳淞時期の沈從文の作品に現れて、後の時期の作品にも受け継がれた幾つの特徴を具え持つ興味深い作品であり、この時期の沈從文の傾向を窺う上で極めて重要な作品であると考えられるけれども、そもそも沈從文の吳淞滞在は1929年夏より1930年8月に至るわずか一年間のことであるし、このときまで紅黒出版処で行動を共にしていた胡也頻や丁玲と離れて単身移り住んだために証言者もほとんどなく、これまで関心を向けられることがなかった。

第一節は、「冬の空間」と近接する諸作品との共通点を明らかにしながら、「冬の空間」の特徴と問題点を確認した。「冬の空間」の舞台は11月、上海郊外の江浜地区（吳淞）にある「私立××大学」での一齣である。この舞台設定は、ほぼ同じ時期に発表された「知己朋友」（第三章参照）と同じい。作者自身を連想させる主人公・文学教授Aの本業は小説家であり、Aを慕う妹・玖は英文系一年の聴講生で、知人の便宜により、兄妹二人そろって大学での生活を許されていた。知人は胡適を暗示する。作中そこかしこに散りばめられた実在の地名・人名は、読む者に虚構との境界を曖昧にさせる。作品は八章に分かれたれ、さらに各章内が細かく段落に分けられる。段落ごとに場面が切り替わるのは、手慣れたモンタージュの技法を襲うものである（第一章参照）。

物語は、玖と同級で密かにAに思いを寄せるらしい玉・五・朱という三名の女学生との軽妙な応酬を一つの軸とし、もう一方にAと玖の兄妹の内面描写を配した構成である。段落ごとに俗物教授の悩み相談やAを貶める学生の落書き事件、女子学生の手紙、Aの入院、蔡夫婦の逮捕（いずれも後述）等の個別の事件がカットバックによって配され、最後に女子学生の自殺未遂によって最高潮を迎える。同時に一人帰郷する母親への言及などが織り込まれ、沈從文のこの時期の作品の多くに見えるテーマがすべて盛り込まれているかの観を呈する。「冬の空間」は、沈從文の中公における学園生活が最も詳細に描かれる作品である。

なお第一節の1は、主人公の同僚である教師達の形象についての考察である。中でも英文教授は、担当教科を受講する女子学生に付け入る隙がないかというよこしまな心を抱いていた。作品中に登場する教師の数は、実はそれほど多くないのだが、その一人が信用できない不埒な人物として描かれることが注目される。この英文教授の形象は、「有学問の人」・「紳士の太太」（1931）あたりから始まる批判的に描かれる知識人の典型を襲う。知識人の描かれ方は、例えば「嵐生同嵐生太太」（1926）等に登場する平凡な中間層とは鮮やかな対称を示すことを考えれば、沈從文がこの時期に至って一連の知識人批判を開始するのは、中公における経験の中に、

その大きなきっかけの一つを見出すことが可能である。同様に第一章の2においては、文壇における評価を絶えず気にする小心翼翼たる知識人として描かれた編集者の形象と、「記一大学生」(1930)に登場する自負と野心と劣等感を心に抱く学生詩人との近似性を指摘した。(第一章の3については省略する。)

次に第二節においては、中公時代に現れて後の沈從文作品において重要な典型人物となったと考えられる少女の形象の原型に、沈從文の末の妹・岳萌の存在が指摘出来るのではないかという観点を提示した。玖の美しい容貌、引っ込み思案で子供じみた純粋さを残した性格と、資料に残された岳萌の人となりとを照らし合わせれば、両者の共通点を見出すことが出来る。岳萌をモデルとしたと考えられる玖という少女に注目して「冬の空間」を見直すことにより、該作品が「一個婦女的日記」(1928)「蕭蕭」(1930)「三三」(1931)ひいては「辺城」(1934)へと連なる、一連の幼い少女の登場する物語の濫觴であると考えられることを指摘した。

第六章

第六章は、中国公学に引き続いて1930年初秋より1931年1月に至るおよそ半年間勤務することになった、沈從文の武漢大学時代の作品における特徴の分析を行い、武漢に至るまでの沈從文作品の作風の変遷の過程を考察した。

この時期の沈從文の動向およびその心境を知る貴重な資料として、中国公学における上司であった胡適に宛てた書信が残されている。初めて武漢に居住することになった沈從文は、この街で起きた出来事について、率直な印象を書き送っている。概ねそれらは、薄汚れた地方都市の悪印象を述べたものなのだが、興味深いことに、この書信に綴られた武漢の有り様と、この時期に執筆された作品に描かれた都会の様子とは、内容のみならず、細かな言葉遣いにまで一致するところが見受けられる。

例えば「湖北大学」という架空の大学に勤務する教師とその下女の価値観の相違を描いた「道徳与智慧」(1930)という作品においては、不潔で無秩序な街の様子が詳細に述べられるのだが、教師はこの街に溢れる兵士を嫌い、あらゆる言葉を用いてこれを罵倒するのに対して、息子が志願して兵役についている下女は、主人の態度に反感を抱きつつ、街で見かける若い兵士を遠くにいる息子と重ね合わせて愛情を注ぐ。そして毎日飽きもせず物干し台から見える練兵場の訓練風景をながめていた。「道徳与智慧」という場合、「智慧」が知識偏重で議論を好む書生気質が抜けず、杓子定規で鈍感な知識人を表すのに対し、「道徳」とは、兵士に対する温かい愛情と同情を蓄えていた下女の心根と行為に対して与えられた名称であると考えられる。作品中には価値判断に関わるような記述は示されないけれども、「道徳」・「智慧」と並べるのは、「道徳」を取るという含意が読み取られる。この作品と胡適宛の書簡を照らし合わせれば、このような二つの相対する価値観の拮抗は、沈從文自身の心の内部に蟠った葛藤の反映であることも窺える。汚れた地方都市を嫌悪する知識人としての感想がしたためられる一方、その所属する大学では学歴がないことから肩身の狭い思いをしていた沈は、安らぎの場として、幼少より慣れ親しんだ兵營の練兵風景に心を寄せている。

さらに、沈從文が兵營に出向いて取材活動を行った成果の一端は、「都市一婦人」(1931)に最も色濃く表れていると考えられる。ここに描かれる軍事都市としての武漢の様子も、多く事実と一致する。ある大学教師が目撃した、数多くの男性を手玉に取る美貌の娼婦の半生と、彼女が心中抱える虚無感と性に対する奔放という特徴は、この作品に先立つ「薄寒」(1930)の中

学教員の形象においてすでに萌芽が見られる。結局武漢時期の沈從文作品において取り扱われた主たる題材は、兵士と婦人に集約されると考えられる。大学教授という語り手を媒介に、武漢における見聞に基づくと推測されるこれら二つの題材を巧みに組み合わせ、さらにストーリーに多少の変化を与えることにより、幾通りもの変奏曲が紡ぎ出されるのである。この手法こそが沈從文の作品多産の要諦であるにほかならない。同時に題材から細部の言葉遣いに至るまで、別の作品や書信等に殆ど同じまま繰り返されることが、その作品の多産と大きな関わりを持つことを指摘した。

以上、文壇登場以来、上海を経て武漢に至るまでの沈從文の作品を通じて、主として「如何に語られているか」という観点より分析を試みた。上記の観点は、「文体作家」「多産作家」という沈從文に与えられた評語を理解する上で極めて有効であると考えられる。この方法によって、北京より武漢時期に至るまでの沈從文小説の演変と、その作風確立の過程を明らかにすることが出来たと思う。

なお小論を、武漢時期の作品の検討までをひとまずの区切りとして、結論を導くこととする。沈從文は、第六章で述べたとおり、武漢における生活をわずか半年足らずで切り上げて、半年間の放浪を経た後、1931年8月からは、かねてより希望していた青島大学に赴任し、さらに1933年9月には張兆和氏との結婚も遂げて、これより数年間は比較的安定した創作活動に入ることになる。

小説に関しては、いずれもこの数年間に、代表作と目される『辺城』と『八駿図』が完成したことが特筆されるのだが、『辺城』は「湘西もの」の、『八駿図』は「都会もの」の、それぞれ集大成であると考えられる。ただし両作品において用いられた手法は、すでに武漢時期に至る過程ですべて完成していたと考えられるから、少なくとも「如何に語られたか」という観点からは、手慣れた手法を繰り返しただけであると言いうる。同時に、第一章に述べた日記体・書簡体小説の手法は、『從文自伝』において活かされることとなったとも考えられるが、この作品もまたそれまでに書き貯められた自伝的な文章の集大成的な意味を持つことが指摘されている。

1930年代後半に至ると、内戦の激化に呼応して昆明に移住したこともあり、沈從文は論文や随筆を除いて、特記すべき作品を残していない。すなわち、沈從文の才能が成熟し、作品に結実したのは、わずかに二、三年のことであると言わなければならない。

論文審査結果の要旨

本論文は序とそれに続く本論全6章、及び結語とにより構成される。

序では、まず沈從文文学に対する従来の評価について概述し、ついで沈從文の小説作品の内「都市もの」に分類される作品群の検討を通してその独自の作風の成立の過程を明らかにするという本論文の目的が述べられる。

第一章では、北京滞在時期（1922-1927末）における自伝的作品を主として取り上げ、とくにその時間描写のあり方を中心に分析を加える。沈從文の小説は、1926年以降様々の小説の技法を修得し、それを作品中に積極的に応用しているのが確認できるが、その中のひとつの技法である時間描写についてもその表現方法が多様化し、精密さを増していることを明らかにし、

そこに作家としての沈從文の進歩の過程が確認できるとの貴重な指摘を行う。また、北京時期の日記体・書簡体の作品が郁達夫の強い影響のもとに生み出されたものであることを、時間描写という具体的観点から分析、指摘している。

第二章では、北京より上海に移住する1927年末前後の作品を特に「自殺」という言葉に注目し考察を加える。まず、郁達夫の影響下に書かれた北京時期の日記体・書簡体小説のほとんどが「金銭・名誉・女人」への欲望と葛藤を主題としたものであること、しかし自殺はその葛藤を昇華する手段として取られてはいないことを指摘する。しかし、1927年前後を過渡期として、一方的な女性への欲望を示す「女人」に代わって男女相互の愛情を示す「恋愛」という言葉が多用されるようになるとともに、この「恋愛」と「自殺」という主題とが同一作品中に現れるようになる。ここに上海時期の沈從文文学のもっとも主要なテーマのひとつが準備され、新たな文学の展開が見られると述べる。

第三章は、前章を承けて、自殺描写の分析を通して、上海時期（1927年末－1931）における沈從文文学の特色について考察を加える。諸作品の綿密な検討の結果、ことに従来殆ど注目されることのなかった「知己朋友」という作品が北京時期の作品の特徴をなお残しながらも、「自殺」という上海時期における主要なテーマのひとつを「恋愛」という新しい男女の関係と結合させるといふ、新たな段階への試みも窺われる過渡的な作品であり、これは性愛の描写、娼婦の形象という以前の沈從文文学には見えなかった表現がこの時期多く登場するのと軌を一にする現象であるといふ、新たな知見を提示する。

第四章は、上海近郊の呉淞に嘗て存在した中国公学大学部在職時（1929年後半～1930年前半）の沈從文の文学的営為について論ずる。国の内外、ことに中国の図書館に蔵される関係資料を博搜、分析した結果、上海時期の沈從文文学に見られる様々の特徴の多くがこの時期の生活の中から生み出されたものであり、この時期が沈從文文学にとって重要な時期であることを指摘する。この時期の沈從文についての先行研究はほとんどなく、如上の結論は、沈從文文学研究にとって貴重である。本章ではそのほか「呉淞文壇」の状況、沈從文作品数編の初出年代の確定等、新たに見出した資料に基づく論述があり、学界を裨益するところ少なくない。

第五章は、前章を承けて、沈從文の中国公学大学部在職中の代表的作品と認められる「冬の空間」を取り上げて実証的に精緻な検討を加え、該作品にはこの時期の沈從文の小説に見られる表現の諸特徴が具備されていること、そしてこの時期以降の沈從文作品に頻見する純粹無垢な少女の形象の祖型が、この時期に中国公学の聴講生であった沈從文の実妹に求められるといふ、重要な指摘を行う。また、新たに見出された新資料に基づく、中国近現代文学に関わる書誌的事項のいくつかについての新しい知見が示され、文学史的に貴重である。

第六章は、武漢時期（1930年初秋～1931年1月）における沈從文について論ずる。沈從文のこの時期の実体験と、当時の作品との綿密な比較検討を通して、この時期の沈從文作品の特徴を明らかにし、とくに沈從文作品の中で重要な位置を占める兵士像の変化が、武漢滞在に触発されたものであるといふ、重要な指摘を行う。また、多産な作家と称される沈從文のその多産さの理由について、身近に取材した限られた話題に次々と潤色を加え作品を量産したからであるといふ、説得力のある推測を行う。

結語では、本論文全体が要約され、今後の展望が述べられる。

以上、本論文は中国近現代文学史に特異な位置を占める小説家沈從文について、文壇登場の契機を得た北京時期より上海滞在時期を経て、約半年という短期間滞在了武漢時期まで、前

後約10年にわたるその前期における文学活動を考察の対象とし、その作風の形成・成熟の過程を明らかにしようとしたものである。その考察に際しては、従来さして高い評価を受けてこなかった所謂「都市もの」を特に取り上げ、各時期の幾多の作品を精密に読解・分析した。その結果、沈從文の作品は北京より上海に移住する時期に大きな変貌を遂げ、代表作『辺城』・『八駿図』等に見られるような作風は武漢時期に至るまでにほぼ完成を見ているのではないかという、従来にない新たな知見を得るに至っている。如上の結論は、とくに上海図書館・中国国家図書館等に蔵される膨大な資料の中から関係する未発表の資料を見出し、それに立脚しつつ立論するという、着実な研究方法に支えられたものであり、説得力を持つ。また、本論文によりはじめて明らかにされた文学史的知見も乏しくない。なお吟味を要するところもないわけではないが、総じてその成果は沈從文文学研究に新しい局面を開くものである。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。